国文学研究資料館所蔵品にみる生巧館の活動と木口木版の受容

石井香絵

要旨

明治二一年、フランス留学から帰国した合田清は、洋画家山本芳翠とともに生巧館を設立し、日本に本格的な木口木版の技術をもたらした。初期の新聞附録から雑誌の表紙、挿絵、口絵、教科書の口絵、挿絵、広告、商標、パッケージなどの多くの複製メディアに登場し、生巧館は出版文化の隆盛とともにその活動が広く知られることとなった。しかしその全貌については不明な点が多く、研究も充分には進められていない。

国文学研究資料館には生巧館が残した木口木版による膨大な数の清刷り(印刷にかける前の試し刷り)が所蔵されている。本稿では特定研究「生巧館制作による木口木版の研究―国文学研究資料館所蔵品を中心に」のこれまでの研究成果をふまえ、生巧館設立前後の時代を見直しつつ当館所蔵品の美術および歴史的価値について考察する。初期新聞附録の時代、続く雑誌・教科書の時代、後年の時代それぞれの活動状況と所蔵品がどのように関連づけられるか検討し、併せて所蔵品を手がかりに生巧館の活動の一端を明らかにしていくことを試みる。

はじめに

本稿は国文学研究資料館特定研究「生巧館制作による木口木版の研究―国文学研究資料館所蔵品を中心に」（研究代表者　石井香絵、研究分担者　岩切信一郎、向後恵里子、谷川ゆき、中村茉貴、増野恵子、森登）の現在までの研究成果をふまえ、国文学研究資料館が所蔵する生巧館資料が、本邦における木口木版受容の歴史のなかでどのように関係付けられるか検討するものである。

同館が所蔵するのは生巧館が明治二〇年代から大正にかけて制作した木口木版約六五〇〇点の清刷りである。木口木版とは通常の木版が桜や桂などの木材を縦に切った板目面を版に用いるのに対して、黄楊や椿などの木目のつまった堅い木を輪切りにした木口面を用いるものである。直彫銅版（エングレービング）で使用されるビュランという道具を彫刻に使うことで細密な表現を可能とする。「西洋木版」「写真木版」とも称された。清刷りとは出版物に掲載される前の試し摺りのことである。薄葉紙に数枚版木から直接摺り出すため、美麗な状態が保たれているが、仕上がりの確認や割付に使用された後は廃棄されることが多く、まとまって何千点も、とりわけ明治期のものが残されているのは非常に稀な例といえよう。(1) 特定研究ではこれら紙片に摺られた一点一点のデータベース化を進め、図版が出版物あるいは商品としていつどのように用いられたか可能な限り明らかにしていくとともに、生巧館の活動および近代日本における木口木版史全体の考察を進めることを目的としている。まずは日本にフランス式の本格的な木口木版の技術をもたらした合田清と生巧館設立前後の活動歴をたどったのちに、当館所蔵品の成立事情や掲載媒体など個々の事例について述べることとする。なお当館所蔵の生巧館作品を掲載する際は図版頁に併せて作品番号を記した。

生巧館設立から初期の活動

生巧館（当時の表記は生巧舘）は明治二一年（一八八八）三月、フランス留学を終えて帰国した合田清（文久二〈一八六二〉～昭和一三年〈一九三八〉）と山本芳翠（嘉永三〈一八五〇〉～明治三九年〈一九〇六〉）によって芝区桜田本郷町一四番地に設立された。[2] 一階が合田の木口木版工房、二階が山本の洋画塾であった。合田は明治一三年（一八八〇）一八歳の時、実兄田島応真のフランス公使館勤務を機に渡仏し、下宿先で当時ジャン・レオン・ジェロームのアトリエで絵画修業中であった山本芳翠と知り合っている。農学を学ぶ予定であった合田は、山本にまだ日本にないものをやってみてはどうかと勧められ、木口木版習得の道に志望を変えることとなる。一八世紀末イギリスのトマス・ビューイックによって開発されたこの技術は、銅版が凹版であるのに対して凸版であるため活字と同じ版に組み込んで刷り出せる利点があり、合田の滞仏期には新聞雑誌や単行本の挿絵に用いられるなど欧米で広く普及していた。合田は翌年シャルル・バルバンに師事し明治一九年（一八八六）まで木口木版の技術を学び、以後も帰国まで研究を続けた。明治一八年（一八八五）と一九年にはフランス美術家協会サロンに入選しており、一九年入選のエミール・アダン《一日の終わり》の木口による複製画は電胎版として持ち帰られ、生巧館の広告に使用されている。[3]

明治二〇年（一八八七）七月に帰国した合田と山本は、大日本印刷株式会社の前身である秀英舎の創立者佐久間貞一の援助を受け、生巧館設立に着手した。当初木版部は道具の用立てに苦労があったようで、合田の回想によれば彫刻刀や版木は多少持ち帰っていたものの弟子の分までは足りず、何人もの刀鍛冶に依頼し製造を試みている。[4] また当時日本には大きな黄楊が無かったので寄木のように版木を何枚も組み合わせる必要があり、版木屋から穴あけ職人、

鍛冶屋でボルトとナットの製造依頼と一枚の版木を準備するために三箇所の手を経由する必要があったという。さらに合田は西欧で実用化されていた裏焼きした写真膜を版木に貼り付けて直接彫刻する技術を写真師成田常吉の協力のもとに成功させ、佐久間の尽力で秀英舎にて印刷技術の研究を行い、版木を電気銅版（電胎版）におこして大量印刷の可能な版を作成するなど新しい印刷技術を導入している。

このように合田は木口木版の本格的な技術を日本にもたらしたのだが、合田の帰国以前においても独学で木口木版を手がける彫師たちは存在していた。そのうち島崎天民を中心とする大成社という一派は『絵入朝野新聞』や外国語の教科書挿絵、『慨世史談　断逢奇縁』（全四冊、小宮山天香訳、鳳文館、一八八七年）挿絵等に活動が知られる。(5) 生巧館木版部初期の入門者はこの大成社の彫師が多くを占めていた。彼らの活動は生巧館入門前後ともに詳細は明らかでないが、設立当初から注文を受けていた木版部にとって、大成社の彫師たちの存在は合田から本格的な技術を教わる立場でありながら、受注仕事の助けにもなっていたと思われる。

生巧館最初期の仕事は文部省編輯局が発行する『高等小学読本』挿絵および『毎日新聞』『東京朝日新聞』の絵附録であった。明治二一年三月一七日の『毎日新聞』五一七二号附録記事「ドイツ皇帝ウヰリアム一世の小傳」に付された《独逸皇帝之肖像》は生巧館設立後の合田の最も早い作例である。(6) また開業早々に文部省の仕事を担うという厚遇は佐久間貞一の伝手により得られたもので、(7) 明治二一年五月二五日出版『高等小学読本』巻之一から明治二二年一〇月二八日出版の巻之七まで木口木版による挿絵が掲載された。朝日新聞と生巧館とのつながりも合田の帰国間もなく始まっている。朝日新聞社社長の村山龍平は、めざまし新聞を買収し東京進出を果たす前年の明治二〇年に大阪で合田と面会し、同社への入社を勧めている。生巧館創業の予定があり、また「一つの新聞社に縛られるのはつらかったし、また若くもあったので、東京へ出て一旗あげたい希望」があったという合田はこれを断るが、いずれ東京で協力

図 1《貴顕之肖像》杜若文庫蔵

図 2《磐梯山噴火真図》郡山市立美術館蔵

する旨をこの時すでに約束していた。[8] 生巧館による木口木版が最初に朝日新聞に登場するのは明治二一年七月一〇日に創刊された『東京朝日新聞』（『めざまし新聞』継続号（数一〇七六号））附録の《貴顕之肖像》（明治天皇像）（図1）である。一面の社告には次のように報じられている。

「曩に仏国に於て八年間の留学をなし専ら此技術を研究して帰朝し爾来洋風彫刻術の門を府下に張り精妙巧手を以て知られたる生巧館合田清氏の彫刻に係る貴顕肖像の図の附録相添へ申候本図ハ刻者合田氏と同じく多年仏国に在て欧風画を攻究せられし同館山本芳翠氏の助修に成り且つ府下各印刷会社中最も信切にして精錬の聞へある秀英舎市ヶ谷工場に於て一々刻者の臨視を得て印刷せしめたる者なれバ本社ハ諸氏の苦心の為に一入の御愛看を希望せざるを得ず」[9]

天皇肖像であることだけでなく、木口木版自体が創刊号の目玉として強調されていたことがわかる。さらに一ヶ月後の八月一日には同じく山本、合田による《磐梯山噴火真図》（図2）が

附録として発行された。七月一五日福島県会津地方磐梯山で起きた大噴火に際し、朝日新聞から委託を受けた山本は現地に赴き下図を完成させ、合田はこれを二日一晩かけて彫刻し原版を制作したという。[10] また明治二三年（一八九〇）元旦には円山応挙の虎図が干支にちなんで木口木版による附録として付けられ、以後毎年継続して十二支の附録が発行された。いずれも大変な反響を呼び、生巧館の名は設立間もない時期より広く知られることとなった。

所蔵品：新聞附録

さて国文学研究資料館所蔵品との関連であるが、初期の新聞附録に関係する所蔵は僅かである。華々しい活動もつかの間、再現性と迫真性に優れた画像を活版と同じ方法で大量生産できる木口木版への需要は、新聞という媒体においては数年で安価な写真銅版に取って代わられることとなる。木口木版が報道としての役割を担った期間は日清戦争前後までの短いものであった。一方教科書挿絵の仕事は以後も長く続いており所蔵品にも多数の作例が確認できるが、『高等小学読本』の挿絵は現在のところ見つかっていない。[11]

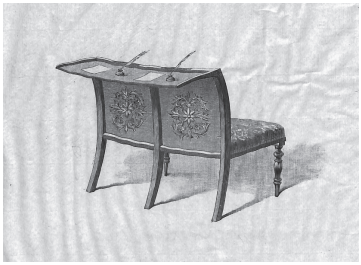

図3《議員椅子》A-04

所蔵品のうち最も早い時期の制作と思われるのが明治二二年（一八八九）一月三日発行の『東京朝日新聞』一二二一号附録に掲載された《帝国議会仮議員全図》のうちの《議員椅子》（図3）である。同図について、明治二一年一二月二九日の『東京朝日新聞』は次のように報じている。

図４《露国皇太子ニコライ殿下御肖像》
A-01

図５《希臘親王ジョーヂ殿下御肖像》
A-02

「来新年の初刊即ち一月三日刊行の本紙にハ曾て屢々本紙附録にて諸君の御高評を蒙りたる彼の生巧館主山本芳翠合田清等の手に成りし極めて精妙巧緻なる帝国議会仮議堂全図を附録として刊行し尚他に全紙大の附録をも相揃候」[12]

創刊号の附録、続いて磐梯山噴火の図で高評を得た生巧館の仕事を新年に再度掲載する旨が告知されている。題材は明治二三年の国会開設を目指して建設中の仮議事堂であった。《議員椅子》は「背後に直に筆記台を設け之を次列議員の使用に便ずるもの」[13]であり、国文学研究資料館には同一の版と思われる清刷りが六点存在する。現段階（平成二八年一〇月）では所蔵品のうち、山本が下図を担当し合田が彫刻したことが確認できる唯一の作例である。

その他所蔵品中新聞附録に用いられた図版は明治二四年（一八九一）五月一六日『東京朝日新聞』一九三八号附録に掲載された《露国皇太子ニコライ殿下御肖像》《希臘親王ジョーヂ殿下御肖像》（図4、5）、同年一一月一五日『東京朝日新聞』二〇八八号の《濃尾震災惨状真図》（図6）のうちの《大垣本町之惨状》（図7）《名古屋栄町惨状》《笠松道路壊裂》《長良川鉄橋傷折》（図8）の四図である。

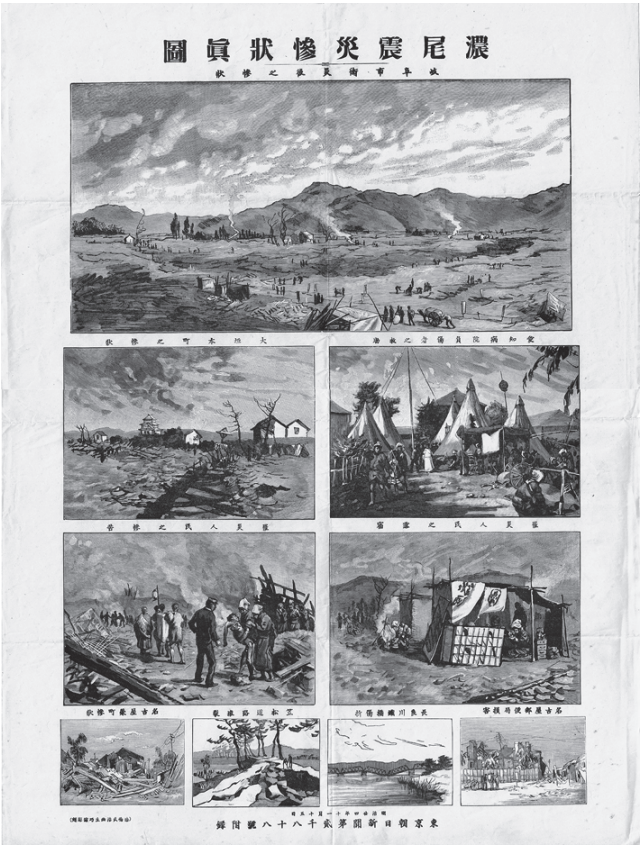

図 6《濃尾震災慘状真図》杜若文庫蔵

ニコライとは後に最後のロシア皇帝となったニコライ二世（ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ロマノフ）、ジョーチとはギリシャ国王ゲオルギオス一世の三男ゲオルギオス・ティス・エラザスである。ウラジオストクに向かう途上の皇太子ニコライがゲオルギオスとともに来日した折のことで、附録が発行されたのは、大津で警察官がニコライを斬りつけ暗殺未遂を起こしたいわゆる大津事件の五日後であった。ただ附録は事件とは直接関係が無く、連日その動向が報じられている大国から来た王族の貴重な近影を公開

図 8《長良川鉄橋傷折》0929

図 7《大垣本町之惨状》A-03

することが目的であったようだ。五月一四日の社告には次のように述べられている。本図は画家を介さず、写真から直接彫りだされたものであった。

「露国皇太子殿下并に希臘親王殿下の御真影ハ世に流布するもの少なからざれど最近のもの至て鮮し我社ハ幸に最近の御撮影にて然も御直筆御署名あるものを得たるに付鮮明なる写真木版に彫刻せしめ附録として発行することとなせり」(14)

《濃尾震災惨状真図》は、《磐梯山噴火真図》同様に自然災害の現況を迫真的な視覚イメージとともに素早く伝えることを目的としていた。自然災害を木口木版によって報道する手法は磐梯山噴火以降度々見られることとなる。たとえば明治二二年は災害の多い年であり、七月二八日に熊本県下で地震が発生し、八月一八日から九月七日まで和歌山県から奈良県南部にかけて大雨が降り続き大規模な水害をもたらした。熊本地震は詳細な報道がなされずにいたところ、「実写したる写真到着せしを以て（略）例に依りお名染の欧風彫刻生巧館技師合田清山本芳翠の両氏に依託し精細なる真図に模刻し」(15) 九月一日の附録《熊本県下飽田郡高橋町市街震災被害真図》（図9）が発行された。原図は仕上がりから判断するに、写真を参考に描かれたものと写真そのものと二通りであったと思われる。なお記事は合田と山本の名を挙げているが、生巧館木版部の一番弟子であった薗田三佐雄の回

図 9《熊本県下飽田郡高橋町市街震災被害真図》杜若文庫蔵

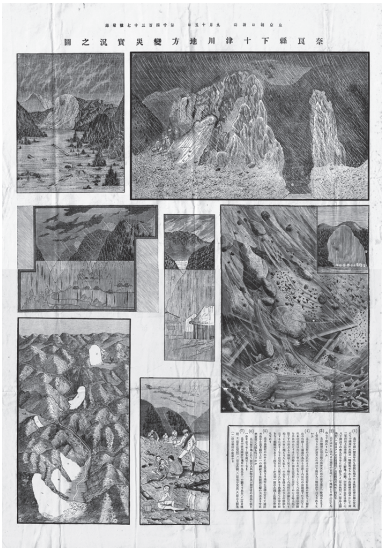

図10《奈良県下十津川地方変災実況之図》杜若文庫蔵

想によれば、薗田は明治二二年八月、合田と生巧館画学校門下生の大山翠松とともに熊本地震の附録編集のため館山に滞在していたという。[16] このため本附録の下図を担当したのは山本ではなく玄々堂印刷所以来山本の弟子であった大山翠松（大山周蔵の弟）の可能性があり、彫刻は合田とともに薗田もその役を担っていたと思われる。また水害の状況は「罹災地及び罹災人家人物等を模写したる惨況真図出張社友の手に依て得たるを以て」[17] 同紙九月一五日の附録《奈良県下十津川地方変災実況之図》（図10）として発行された。そして明治二四年一〇月二八日に発生した濃尾地震に際しては、東京朝日新聞は磐梯山噴火時と同様に記者と画家を現地に派遣している。この時派遣された画家は当時生巧館に通い山本芳翠に師事していた藤島武二であった。一一月一一日の社告では次のように報じられている。

図11《和歌山県下西牟婁郡中変災実況之図》杜若文庫蔵

「惨状真図発行

（略）今回の震災たる実に安政江戸の大地震に勝るとも尚劣らざるの大災にして罹災地方の状況ハ得て文字のみの尽くす可らざるものあるなり是を以て我社に於てハ曩に社員古谷次郎氏を特派して震害地の実況を視察せしむると共に尚欧風木版の技に都下第一を以て知られたる生巧館に委嘱し同館画手藤島武治（ママ）氏をして即時震災地に向ひ星行露宿深く岐阜大垣の惨状を探らしめ因つて得たる所の幾多の写生図を齎らし還りて尚之を精描細写し爾来同館主合田清氏に嘱して製版中なりし（中略）愈々来る十五日を以て一大附録として之を刊行せんとす」[18]

はじめ日本画を学んでいた藤島は明治一七年（一八八四）一七歳の年に上京し翌年川端玉章の門に入り、明治二三年に洋画に転向した。曽山幸彦、中丸精十郎、松岡寿に学んだのち生巧館に移っている。《濃尾震災惨状真図》は入門して間もない画学生の藤島に与えられた大役であったといえよう。なお大山や藤島のように、木口木版の下図制作はしばしば生巧館画学校の画

家たちが担っていたようである。それは山本が黒田清輝と久米桂一郎に画塾を譲り、天真道場に受け継がれてからも同様であった。

また東京朝日新聞が生巧館に依頼していたのに対し、大阪朝日新聞では生巧館以前から大成社系の彫師小永井天橋が木口木版による挿絵を手がけていた。馬渕録太郎によれば、小永井は明治一九年に朝日新聞に入社し木口木版による挿絵や絵附録を手がけていたが、明治二一年に一時退社しサンフランシスコで修行を積み、翌年六月に再入社したという。[19] 明治二二年の大水害の際、小永井は和歌山県における被害図を制作し一〇月一日に《和歌山県下西牟婁郡中変災実況之図》（図11）が発行されている他、濃尾地震の被害状況においても小永井が附録を手がけ、明治二四年一一月八日と一二日に《岐阜県下震災之図》が発行された。いずれも写真を原図としている。[20] このように合田の帰国後も木口木版は生巧館一色となったわけではなく、旧来の系統による活動も継続していたのである。

雑誌・教科書の時代

生巧館は上述した新聞附録の時代と、続く雑誌の表紙・口絵・挿絵、教科書の口絵・挿絵を飾った明治三〇年（一八九七）頃までがその黄金期であった。生巧館が知名度を上げていった時期は雑誌刊行の時代と重なっており、二〇年代に刊行された雑誌の表紙は一時期ほとんどが木口木版となるほど流行のスタイルとなった。また山本芳翠は明治二六年（一八九三）に黒田清輝と久米桂一郎が帰国すると翌年に画塾を譲り、生巧館は明治二七年（一八九四）一〇月より画塾天真道場となった。塾生であった湯浅一郎、北蓮蔵、白瀧幾之助等はこの時黒田・久米門下に移っている。山本はパリ時代に黒田と出会いその画才を見出し、法律を学ぶ予定であった黒田を説得し画家に転向させている。画

塾を明け渡すことは予てから話し合われていたというが、黒田らが引き継いだのは生巧館画学校の方で、木版部はその後も存続した。明治二四年、大量に注文を受けていた木版部は赤坂区溜池町に工場を設置し、天真道場開設後はこの溜池の地に拠点を移し活動を継続した。合田と黒田はフランス留学時以来の関わりがあり、山本、久米らとともに白馬会を結成し研究所を溜池の工房二階に開設するなど、生巧館と洋画界のいわゆる「新派」との活動は以後も続くこととなる。さらに明治二九年（一八九六）に東京美術学校に洋画科が新たに設けられ、黒田と久米が着任すると、合田は同校のフランス語講師となっている。

明治二〇年代後半は、生巧館の膨大な仕事量と合田の活動の幅の広がりが認められる充実した時代であったといえる。しかしこの頃の作例で、新聞附録のように合田の手仕事であることが判明しているものは少ない。充分な数の弟子が育っていたであろうこの時期より、合田は徐々に制作の場を離れ経営に注力するようになったと思われる。

国文学研究資料館所蔵品の多くはこの時代に制作されたものである。清刷りは紙片に摺りだされた図以外に情報の無いものがほとんどであるため、掲載先を特定するためには刊行物を予測し掲載図版と逐一照らし合わせていく作業が必要となる。したがって図版の特定は容易ではなく、現段階で判明している点数は全体の一割に満たないのが実情である。ゆえに判断材料は未だ充分でないのだが、特定できた作品や関連調査をもとに推測すれば、所蔵品のうち一定の割合を占めているのが明治二四～三〇年頃の木口木版雑誌・教科書全盛期の図版であると考えられる。合田・山本の手による初期の時代を過ぎ、弟子が育ち工房が拡大し、大量の受注に応えていた時代の清刷りが当館コレクションのひとつの核となっているようである。以下より所蔵品を中心に、同時代の特筆すべき作例や傾向を述べていくこととする。

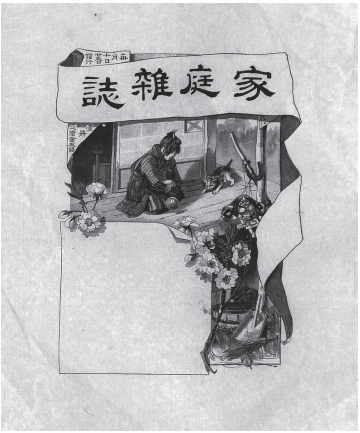

図13《『家庭雑誌』第69～111号表紙》
作品番号未定

図12《『国民之友』第309～360号表紙》
B-0341

下図を描いた画家

山本芳翠や藤島武二のように、木口木版の版下を担当した画家は複数名確認できる。雑誌の表紙では原田直次郎の手がけた民友社発行の『国民之友』がよく知られた例であろう。生巧館は明治二一年七月六日発行の『国民之友』第二五号より表紙を担当しており、原田は翌年八月二二日発行の同誌第五八号に森鷗外翻訳詩集「於母影」が掲載された際初めて挿画を寄せている。その翌年の明治二三年から表紙の下図を手がけ、生巧館との仕事が継続することとなる。所蔵品の清刷りのうち『国民之友』の表紙は一点のみ確認できるが、明治二九年八月一五日～明治三〇年八月七日(第三〇九～三六〇号)の期間掲載された後年のものである（図12）。同図は右下に「生巧館刀」のサインがあるのみで下図の制作者は特定出来ていないが、時期が下ること、また作風が異なることから原田ではないと考えられる。

また和田英作は明治二五年に原田の画塾鍾美館に入門し、同二七年原田の病気療養に伴い天真道場に移るという生巧館に縁のある経歴を辿った画家で、木口木版の下図制作も担っていたようである。

図14《『太陽』第1巻
第1～12号表紙》B-0381

図15《『太陽』第3巻
1～27号表紙》B-0359

図16《『太陽』第4巻
1～25号表紙》B-0342

明治二九年一月四日～八月一日『国民之友』（第二七七～三〇七号）の表紙には和田のサイン「E.W.」が刻まれており、同年一月～明治三〇年一二月家庭雑誌社発行の『家庭雑誌』（第六九～一一一号）の表紙にも「E.WADA」と記されているほか、明治三一年一月一日～一〇月一五日（第四巻第一号～二三号）の博文館発行『少年世界』に木口木版による口絵「動物標本」の掲載が確認できる。このうち『家庭雑誌』の清刷りが所蔵品に収められている（図13）。所蔵品には同図以外にも「E.W.」のサインの入った清刷りが四点確認できる。

また本多錦吉郎の画塾彰技堂の後小山正太郎の画塾不同舎に学んだ佐久間文吾は、明治二七年一二月二八日博文館発行の『太陽』創刊号の表紙をデザインし、木口木版による口絵《戦捷の元旦》を手がけている。同誌は佐久間について「生巧館に入りて絵事に従事し」と記している他[21]、馬渕によれば佐久間は生巧館の版下画家としてほとんど専属のように描いていたというから[22]、佐久間はこの仕事に限らず多くの下図を手がけていたと考えられる。所蔵品には創刊号の他複数の『太陽』表紙図が存在するほか（図14～16）、戦場を描いた挿絵と思われる清刷り二点に「B.SAKUMA」のサインが確認できる（図17、18）。ただし専属のように描いていたというのであれば、『太陽』表紙のようにサインの無いものの方が多いと思われる。少

図18　2374

図17　2373

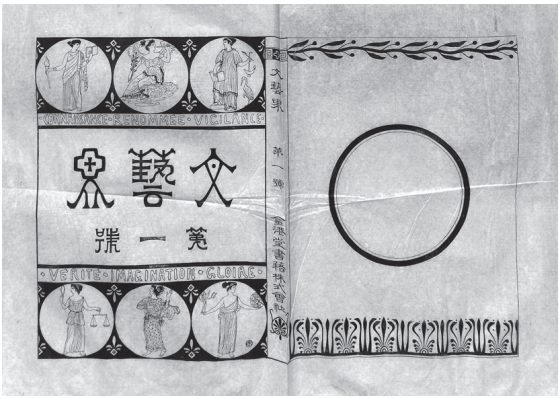

図19《『文藝界』第1～5号表紙》B-0360

なくとも同誌の他の号の表紙については佐久間が下図を描いた可能性があるだろう。

黒田清輝による下図もまた所蔵品のうちに確認できる。黒田と合田との仕事は、黒田が日清戦争に従軍した際のスケッチを合田がおこし『ル・モンド・イリュストレ』に送ったものが早い時期の作例である。当館が所蔵するのはさらに時代の下った明治三五年（一九〇二）三月金港堂発行の『文藝界』創刊号を飾った表紙と背表紙、裏表紙の清刷りである（図19）。しかし同図は木口木版に特徴的な細かい線条による黒線と白線を活かした陰影などは無く、また実際に出版された際の表紙は多色刷りで、木口木版のモノトーンで緻密な表現とは全く印象が異なっている

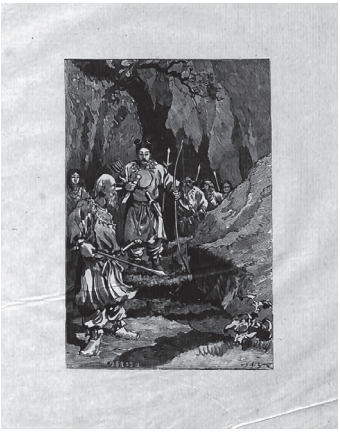

図21《天孫降臨の図》0005

図20《『文藝界』第1号表紙》杜若文庫蔵

（図20）。そして『文藝界』創刊号目次には、「表紙（石版色摺）黒田清輝画」と記されており、清刷り（図19）に使われた版は使用されていない可能性がある。清刷りは出版された表紙（図20）のうちの墨刷りの部分に該当する。ただし「文藝界 第一號」の文字は使われておらず別の書体となっている。またこの表紙は同年七月一五日発行の第五号まで続いているが、配色や「文藝界 第〇號」の文字は号によって変わっている。この他の墨刷り部分のデザインは細部まで酷似しているが、一部衣服の皺などに微妙な違いも見られる。本表紙は所蔵品（図19）の存在から一度木口木版におこされていたことが分るものの、その用途は今のところ判然としていない。

教科書の口絵や挿絵に使用された清刷りには藤島武二、浅井忠、中村不折、二世五姓田芳柳の名がサインによって確認できる。藤島の挿絵は明治二八年（一八九五）九月博文館発行の『新撰日本小歴史』に掲載された「天孫降臨の図」である（図21）。右下に「フジシマ」、左下あたりに「生巧舘刀」のサインが入っている。藤島は明治二六年より二十九年まで三重県立第一中学校に赴任しており、同図は藤島が東京美術学校助教授に着任する前年の制作である。また生巧館は黒田や久米、その門下であるところの新派と親しい関係にあったのだが、教

図22　0572

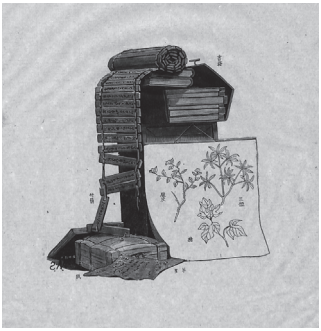

図23　0592

科書の挿絵には浅井、中村、二世五姓田といったいわゆる「旧派」の画家の名が見られる。挿絵の仕事は国粋主義の時代、木口木版に限らず洋画家にとって生活の糧となっていたであろうし、とりわけそれは「新派」の活躍の陰に隠れることとなる「旧派」の画家に顕著であったと思われる。

たとえば明治二六年九月学海指針社発行の『帝国読本　巻之一～八』には浅井、中村、二世五姓田、下村為山（二神純孝）等による木口木版の挿絵が多数掲載されている（このうち五姓田は板目木版の挿絵も手がけていたようである）。同書のうち所蔵品には巻之四掲載の浅井のサイン「CA」の入った挿絵（図22）、巻之五掲載の中村のサイン「S.N.」の入った挿絵（図23、Sは本名鉾太郎の頭文字）、巻之八掲載の二世五姓田のサイン「H.G.」の入った挿絵（図24）の清刷りが存在する。

中村不折については同じく学海指針社が明治二六年七月に発行した『万国地理初歩』上下巻にも挿絵が多数掲載されており、上巻の「不折」と記された挿絵（図25）は所蔵が確認できる。石井柏亭は中村について「生活の為めに佐久間や下村と一緒に絵手本を描いた。それは普及社といふ処から出したものである。また其後旅籠町にあつた学界指針社に雇はれて教科書の画を書きもした。」[23]と述べている。中村は挿絵の掲載が確認できる明治二六年頃、学海指針社の挿絵画家として活動していたようである。なお

引用中の「佐久間」は佐久間文吾、「下村」は下村為山であり、三人は不同舎の門人であった。

二世五姓田芳柳もまた挿絵を多く手がけていたようで、所蔵品には上記の挿絵の他明治二四年九月金港堂発行の『理科入門　有用之動植物』口絵（図26）他二点「H.G.」と記された清刷りが存在する。この他明治三〇年一月一日～一二月一五日（第三巻第一号～二六号）の博文館発行『少年世界』に木口木版による口絵「日本武将鑑」を掲載している。

図24　0668

図25　1030

図26　B-0339

生巧館の彫師

次に彫師について検討したいが、生巧館の修行制度や、どのような人物が入門し彫師として活動したかといった詳細について知れるところは僅かである。参考資料として板橋区立美術館発行『日本の木口木版画 明治から今日まで』に彫師の一覧がまとめられているほか[24]、明治三六年（一九〇三）に生巧館に入った馬渕録太郎が回想記を『木口木版伝来と余談』に残しており、貴重な文献となっている。馬渕によれば生巧館開業時に最初に入門したのが上述した薗田三佐雄であり、続いて大成社一派の島崎天民や加藤保民であった。明治二三年には北君衛（北蓮蔵の姉）、大江太、合田舜子（合田の妻）、中山要太郎の名が挙げられており、馬渕の入門した明治三六年に生巧館の館員であったのが森島清三郎、志津順哉、渡辺広五郎、岸上光吉、菊地武嗣、吉沢六朔、山形駒太郎であったという。彼らが彫刻した図版は印刷物や当館所蔵品の清刷りに多く残されているであろうが、具体的に誰が何を手がけたか特定できる例は後述する大正期の作例を除いて稀である。「生巧館」の名は最新の複製技術として開業時よりブランドとなっていたが、合田以外に彫師の名前が表に出ることはほとんど無かったようである。

所蔵品の清刷りには下図の作者や彫師のサインの入っていないものが大半である。たとえば《磐梯山噴火真図》には「生巧館　山本芳翠画　合田清刻」と生巧館の名とともに画家と彫師の名が記されているが、所蔵品にそのような例は見当たらない。最も多く確認できるのは個人名が入らず生巧館の制作であることのみ記されたサインで、その数はおよそ二〇〇点である[25]。表記は「生巧舘刀」「生巧刀」がほとんどで、「東京生巧舘刀」「Seikokan.sc」「SEIKOKAN」も一点ずつ確認できる。また「生巧くわん亜鉛ばん」のサインも二点存在するが、これは木口木版ではなく合田が一時期試みていた亜鉛版と思われる[26]。生巧館のサインは雑誌の表紙や著名な画家が下図を手がけた場合などの重要な仕

事の際に記していたと考えられるが、無記名の図版とのより細かい違いや「生巧舘刀」「生巧刀」など表記の使い分けについては判断し難く、今後の課題となっている。

館員のうち、どのような立場であったか判然としないのが大成社の彫師たちである。生巧館開業後すぐに入門したと伝えられるこの一派であるが、完全にその傘下には入っていなかった可能性が考えられる。たとえば生巧館開業後に博文館で発行された雑誌『日本之少年』は表紙が木口木版で挿絵にも多数掲載されているが、第二巻第一号～三号（明治二三年一月一日～二月一日）の表紙には「大成社刀」のサインが入っている。そして次号の第二巻四号（二月一五日）からは表紙のデザインが変わり、「生巧舘刀」にサインが代っている。また大成社系の彫師である森山天葩は生巧館に入ったとされているが、[27]「天葩刀」と個人名のサインの入った挿絵は生巧館開業後の年代においても多く見受けられる。[28] 生巧館のなかで個人のサインが確認できるのは合田清のみで、「合田刀」「K.GAUDA」の表記が多い。このほかに薗田三佐雄と思われる「M.SONODA.S.C」のサインも『実業世界太平洋』第二巻第二号（博文館、明治三七年一月一五日）表紙に確認できるが、馬淵によれば薗田はこの頃既に独立して自営していたという。[29] 開業以前から活動していた館員についてはサインを記す風潮があったのかもしれないが、森山についてはそもそも生巧館門人の時代があったかどうか疑問である。

所蔵品の清刷りには大成社系のサインの入ったものは見当たらない。おそらく当館の所蔵品は生巧館設立以降に育った弟子の手によるものが大半であろう。しかしコレクションの性質を知るうえでも、また木口木版の歴史を知るうえでも、大成社の活動および生巧館との関係性については調査を進めていく必要があると考える。

図28《『小国民』第6年1～12号表紙》B-0379

図27《『少年世界』第1巻7～18号表紙》B-0352

所蔵品：雑誌・教科書

出版社との関わりについてもいくつか傾向が指摘できる。当館所蔵品のうち、雑誌の表紙に使われたことが確認できる清刷りは三二点、重複分や掲載先が確認出来ていないものも含めると五〇点ほど存在する。また広告用に雑誌名等がデザインされた図が一〇点確認できる。雑誌の表紙は前述した『国民之友』、『家庭雑誌』、『太陽』、『文藝界』の他、博文館発行『少年世界』（図27）、学齢館発行『小国民』（図28）、三才社発行『天地人』、大日本社発行『大日本』、東京同文館発行『商業世界』、経済雑誌社発行『史海』等様々であり、掲載期間は明治二七～三〇年であるものが多い。このうち特に生巧館と密接に関わっていたと思われるのが博文館と学齢館である。木口木版の表紙は明治二〇年代において流行となったが、中身の口絵や挿絵まで木口である例は表紙の数ほど多くはない。木口木版の挿絵が特に多く掲載されるのは児童雑誌や少年雑誌の類であり、大抵の場合は板目木版や石版や写真版と混雑するかたちで挿入されている。したがって上記の雑誌のなかでは『少年世界』や『小国民』に生巧館の仕事が多く見られるのである。

図29《博文館新刊報告》
B-0396

図30《『帝国文庫』広告》
B-0346

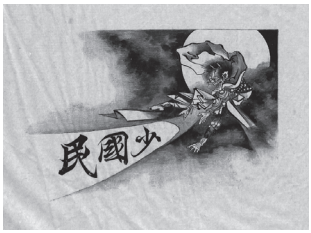

図31《『少国民』第8年1号
甲種表紙》

博文館は明治二八年にそれまでの雑誌を統廃合して『太陽』、『少年世界』、『文藝倶楽部』の三誌を新しく刊行した。[30] 清刷りには『太陽』と『少年世界』および前年の二七年に刊行された『日清戦争実記』の表紙が確認できる。しかしこれ以前に発行された雑誌の表紙は所蔵がないようである。たとえば『少年世界』の前身である『日本之少年』や『幼年雑誌』には表紙・挿絵ともに木口木版が用いられているが、それらの表紙は所蔵品には見当たらない。後年のものについては明治三七年（一九〇四）に発行された『日露戦争実記』、『実業世界太平洋』の表紙が清刷りとして所蔵されている。さらに表紙の清刷りが所蔵されている場合はその誌面中の挿絵も所蔵されている可能性があるが、博文館発行誌全体の調査は未だ充分には進められておらず確かなことが述べられない状況である。現在特定出来ているのは『太陽』に掲載された挿絵六一点である。この他の雑誌、特に『少年世界』は木口木版の挿絵が多く入っているので今後の調査課題としたい。なお、博文館の仕事については表紙や挿絵だけでなく新刊報告や広告ページのデザインも生巧館が多く手がけていたようで（図29、30）、両者の密接な関係性が窺える。

『小国民』は学齢館の創業とともに明治二二年七月に創刊した児童向けの雑誌である。[31] 編集は当時小学校教員であった石井研堂（民司）が担

図33　B-0067

図32　B-0539

当した。所蔵品には明治二五年から二八年の期間に掲載された表紙五点の清刷りが存在する。また同誌は国策を否定したとして明治二八年九月一五日発行の第七年第一八号で発行停止処分を受けており、同年一一月一〇日に雑誌名を『少国民』に変え改題第一号を発行した。この『少国民』時代の表紙図も一点所蔵されている（図31）。『小国民』は『少年世界』以上に木口木版の挿絵や口絵が多く入っており、所蔵品にも現在までの調査で六四点が確認できる。挿絵は動植物や風景といった木口木版の細かい表現が活かされる題材が多い一方で、戯画のような写実的である必要のないものまで表現されている場合があり興味深い（図32）。

教科書の挿絵もまた『高等小学読本』以来生巧館の重要な活動分野となっている。現在までの調査をもとに推測すれば、その最盛期は雑誌と同じく明治二〇年代から三〇年代あたま頃である。また教科や出版社によっても傾向の違いが見られる。木口木版の図版は地理や理科の教科に多く、清刷りにも国内外の風俗や風景、動植物といった該当科目らしき図が多数確認できる。ただし上述した『帝国読本』や『新撰日本小歴史』などの歴史教科書、またリーダーと思しき挿絵も多数存在するため、他教科も含め広く調

査していく必要がある。また出版社については金港堂と学海指針社に木口木版の図版が特に多く、他に冨山房、文學社、三省堂、大日本図書にも多く見られる。教科書の挿絵・口絵で現在清刷りの掲載先が特定しているのは、上述した資料では『新撰日本小歴史』一六点、『帝国読本 巻之一～八』三点、『訂正帝国読本』四点、『理科入門 有用之動植物』一三点の他、明治二四年九月金港堂発行『理科入門 人体及ビ動物生理』一三点、明治三三年（一九〇〇）二月大日本図書発行『動物教本』五〇点など合計で一〇〇点ほどである。

なお所蔵品の清刷りには、一枚の紙にまとめて複数の版が刷りだされているものが多く存在する。また紙の端に穴が開けられ、こよりで複数枚まとめられている例も多く見られる。これらは雑誌や教科書など一冊に複数の挿絵を掲載する場合、出版社に見本を提出する際にとられた形態と考えられる。このため同一の紙やこよりでまとめられた束にある図版は同じ出版物に掲載されている可能性が高い。たとえば図33の一〇図はすべて『小国民』第五年第二一号または二二号（明治二六年一一月三日、一八日）に掲載されているし、『動物教本』に掲載された挿絵五〇点の清刷りは三図を除いて同一のこよりの束のなかに収められている。このように印刷前の確認に使用された状態がそのままのかたちで残っているのも本所蔵品の大きな特徴である。

所蔵品：広告・煙草パッケージ

生巧館は出版社だけでなく、商品や企業の広告デザインの製版もまた多く手がけている。清刷りに残っている最も早い時期の例がスコット乳菓で（図34）、他に胃活（図35）や吉沼時計店（図36）など明治二～三〇年代の新聞や雑誌で頻繁に目にする広告を作成していたようである。ただし胃活の広告は清刷りでは西洋人だが、実際に出版物等で

図34《「スコット乳菓」広告》0564

図35《「胃活」広告》B-0274

図36《「吉沼時計店」広告》B-0271

出回っているのは日本人の姿であり、清刷りの案がそのまま採用されたわけではないようである。また大阪の楽器店である開成館三木楽器店は会社の広告用デザインのみならず、商品であるオルガンの図も生巧館が担当している（図37、38）。さらに三木楽器創業者の三木佐助が明治三三年に発行した『鉄道唱歌』の表紙も担当しており、第二集の表紙については清刷りの所蔵が確認できる。このほか明治三七年の煙草専売法が施工されるまでの煙草のパッケージデザインも多数作成していたようである。創業者の岩谷松平が自ら広告塔となって派手な宣伝を繰り広げた岩谷商会の天狗たばこも生巧館がパッケージを担当しており、天狗たばこのシリーズのうち「中天狗」の清刷りが所蔵品のうちに確認できる[32]（図39）。さらに木村商会の「THE HAWK CIGARETTES」（図40）や東海煙草株式会社の「THE TOKAI CIGARETTES」（図41）のほか、商品名が入ると思われる部分が余白で残され、「精撰刻莨」（図42）の文字とデザインの施された清刷りも複数パターン存在する。このほか詳細は明らかでないが、様々な会社の商標も多数制作していたようである。

図38　B-0108

図37《「三木楽器」広告》B-0148

図40《「THE HAWK CIGARETTES」パッケージ》B-0127

図39《「中天狗」パッケージ》B-0122

図42　B-0283

図41《「THE TOKAI CIGARETTES」パッケージ》B-0278

後年の活動

このように生巧館は創業から明治三〇年代にかけて新聞、雑誌、教科書、広告と様々な分野で活動の場を広げていったが、その後の需要は印刷技術の更新と流行の変遷によって次第に減少することとなる。他の版におされ就業者が多く去っていくその様を小野忠重は坂を下るまりのはやさであったと表現している。[33] しかしながら生巧館は最盛期を過ぎた後も、昭和二、三年頃までは存続していたようである。[34] そして具体的な年代は特定出来ていないものが多いが、後年の時代の仕事もまた当館所蔵品の一角を占めていると考えられるのである。

生巧館は明治四一年（一九〇八）、合田の転居に伴い豊多摩郡渋谷町に工房を移している。馬渕は自身が入門した明治三六年頃の合田について次のように述べている。

「生巧館へいらっしゃっても、彫刻の仕事はもうなさられず、専ら外交方面であるが、それも多く著者の家に招ばれて、原画の説明を聴かれるのである。（略）合田先生ならば、著者の意のあるところをよく汲み取ることができるので、いつも著者から招かれるのである。（略）生巧館へ戻って来られて、館員の一番先輩で年長者に、原画の説明をされるのであるが、先輩もよく心得ているので、著者の思うところが完全に彫られるので、どうしても生巧館へ依頼しなければと、出版社も生巧館を信用して任せることになっていたのである。[35]」

生巧館の活動は徐々に専門的かつ写真では表せない細かい描写の必要な仕事に比重を傾けていったと考えられる。

所蔵品には多数の人体解剖図や植物の組織図、金属製品の図が確認できるが、これらがおそらく後期の仕事に該当すると思われる。また合田の帰国以前から木口木版の彫師として活動していた芝築地派の芝築地三郎は、大正から昭和期の戦時中までその仕事が続いていたことを記述している。[36] 印刷業としての木口木版の仕事は細々とながらも継続しており、当館所蔵品はそうした後年の仕事を知る貴重な資料となっているのである。

この時期の清刷りで制作年代の判明しているものが、大正五年（一九一六）の至誠堂書店との仕事である。所蔵品には「大正五年〇月」あるいは「大正六年〇月」「入金済」「支払済」と紫色の判で押されたものが一〇〇点以上存在する。そしてこれと同様の判で「大正五年四月七日」「入金済」と押印された至誠堂編集部から生巧館に宛てた葉書も所蔵されているため、押印のある清刷りは至誠堂書店との仕事と推測できる。葉書には「井上英和辞典挿絵木版六拾弐点右確に受取申候也」と記されているが、これは井上十吉著『井上英和中辞典』（至誠堂書店、大正五年）であることが判明している。本書には辞典に示された語を説明する多数の小さな挿図が掲載されており、図版の特定作業は未だ進行中であるが、アルファベット順に見るとA～Fのページまでで既に五二点の挿図が清刷りのうちに確認できる。清刷りは図43のように一枚に複数の挿図が並んでいる状態であり、挿図の総点数を予測すれば、葉書にある「六拾弐点」とは清刷りの枚数を指していると考えられる。本書の挿図はほとんど言及されることのない大正期の生巧館の仕事として注目すべき作例といえよう。押印の入った清刷りは他に教科書や一般書籍に掲載されたと思われる図にも多数確認できるため、大正五、六年頃の至誠堂書店の出版物に

図43　0057

ついては引き続き調査を進めていきたい。

なお、至誠堂の押印の入った紙片の多くには鉛筆やペンで彫刻を担当した彫師の名と思われる書き込みが確認できる。たとえば図43の右手に書き込まれた「吉」は吉沢六朔であろう。別の紙片には「吉沢」や「六朔」の書き込みも複数確認できる。このほか「菊」、「志」、「渡」の文字も確認でき、それぞれ菊地武嗣、志津順哉、渡辺広五郎と思われる。これらの彫師は大正五、六年にはまだ生巧館に在籍していたようである。

おわりに

木口木版は明治期の出版物に親しんだ者ならば、意識せずとも挿絵や表紙、広告を通じてそのイメージが刷り込まれてしまうほど頻出する複製技術である。しかしその広範なイメージ群は、広範に渡っているがゆえにまとめて言及される機会は少なく、また概観することが困難である。当館の作品群は、日本における木口木版の中心的な機関であった生巧館の仕事を、美麗な摺りでひとまとまりに閲覧できる類例のないコレクションである。その研究は端緒についたばかりであり、本稿においてはコレクションの大まかな性格を述べたに過ぎないが、当館所蔵品が有する生巧館と画家や出版社との関わり、彫師の活動状況に関する手がかりを僅かながら示すことが出来た。今後も基礎調査を進めつつ、個別の作例への考察を深めることで研究の成果報告につなげたい。

謝辞

明治期教科書の調査に際しては滋賀大学附属図書館教育学部分館の皆様にお世話になりました。また図版の掲載に

あたっては研究分担者森登、増野恵子の協力に依っています。この場をお借りして御礼申し上げます。

〔注〕

（1）国文学研究資料館所蔵品の清刷りについては森登「銅・石版画万華鏡九四　木口木版の登場」（『日本古書通信』第一〇三一号、平成二七年六月）を参照。

（2）合田清および生巧館の履歴については以下の文献を参照した。「合田清君ノ肖像及履歴」『印刷雑誌』第一巻第二号、印刷雑誌社、明治二四年三月。合田清「西洋木版思ひ出話」『アトリエ』第五巻第一号、アトリエ社、昭和三年一月。合田清「昔話」『美術新論』第四巻第一二号、美術新論社、昭和四年一二月。長尾一平編『山本芳翠』、昭和一六年。小野忠重「木口木版年代記（一）～（三）」『印刷界』日本印刷新聞社、昭和三三年六～八月。馬渕録太郎『木口木版伝来と余談』昭和六〇年。丹尾安典「近代の彫師・合田清」『日本の木口木版画　明治から今日まで』板橋区立美術館、平成五年。岩切信一郎『明治版画史』吉川弘文館、平成二一年。

（3）岩切信一郎「生巧館広告文付き「一日の終わり」（エミール・アダン画、合田清刻）の発見」『一寸』第一八号、平成一六年参照。

（4）前掲（2）合田清「西洋木版思ひ出話」参照。

（5）大成社および合田帰国以前の木口木版彫師については以下の文献を参照した。松岡希代子「木口木版画―明治から今日まで―」『日本の木口木版画　明治から今日まで』板橋区立美術館、平成五年、青木茂「木口木版のいろいろ」『町田市立国際版画美術館紀要』第四号、町田市立国際版画美術館、平成一二年、岩切信一郎「木口木版・写真木版　●故矢川澄子さんに捧ぐ」『一寸』第一一号、平成一四年。

（6）《独逸皇帝之肖像》については森登「玄々堂、明治の残影と草創期の木口木版」『一寸』第二三号（平成一七年七月）を参照。

（7）豊原又男『佐久間貞一小伝』（故佐久間貞一君胸像建設事務所、明治三七年）、一二三頁に以下のように記されている。「時に文部省は編輯局を設け図書出版の企図ありしを以て、氏は局長伊澤修二氏に請ふて、文部省出版の図書に、西洋木版彫刻を用ひられんことを申請し、高等小学読本中の挿画に応用するの認諾を経て其依嘱を受けたり。」

（8）『朝日新聞社史　明治編』朝日新聞社、平成二年、一九七頁。

（9）『東京朝日新聞』一〇七六号、明治二一年七月一〇日、一面。

（10）《磐梯山噴火真図》については増野恵子「明治期の災害画像を考える―メディア史の視点から―」『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』第二号（神奈川大学21世紀ＣＯＥプログラム研究推進会議、平成一六年）に詳細に論じられている。

（11）『高等小学読本』の挿絵に酷似した図は三点見つかっているが（作品番号2775, B-0418, B-0988）、挿絵に無いものが描かれていたり細部が異なっているため後年の制作と考えられる。

（12）『東京朝日新聞』一二二〇号、明治二一年一二月二九日、一面。

（13）「帝国議会仮議院」『東京朝日新聞』一二二一号、明治二二年一月三日、二面。

（14）「御肖像附録」『東京朝日新聞』一九三六号、明治二四年五月一四日、一面。

（15）『東京朝日新聞』一四二一号、明治二二年八月二八日、一面。

（16）薗田三佐雄「十年後の追懐」『原田先生記念帖』原田直次郎氏記念会、明治四三年（覆刻版は明治美術学会発

行、平成二七年）四四―四六頁。

（17）『東京朝日新聞』一四三四号、明治二二年九月一二日、一面。

（18）「惨状真図発行」『東京朝日新聞』二〇八四号、明治二四年一一月一一日、一面。

（19）前掲（2）馬渕録太郎『木口木版伝来と余談』、一一―一三頁参照。

（20）小永井と生巧館の作風の違いについては前掲（10）増野恵子「明治期の災害画像を考える」にて詳細な考察がなされている。

（21）「太陽揚輝の美術家」『太陽』第一巻第一号、博文館、明治二七年一二月。

（22）前掲（2）馬渕録太郎『木口木版伝来と余談』、一三二頁参照。

（23）石井柏亭「中村不折小伝」『不折画集』太平洋美術学校刊、昭和一四年、六頁。

（24）「彫り師、版画家略歴」『日本の木口木版画』板橋区立美術館、平成五年

（25）中村茉貴「生巧館について―木口木版（清刷）の初出と款記」（神奈川県立歴史博物館調査研究成果報告会、平成二八年三月一日）配布資料参照。

（26）前掲（2）馬渕録太郎『木口木版伝来と余談』、八〇頁、前掲（10）増野恵子「明治期の災害画像を考える」参照。

（27）前掲（25）「彫り師、版画家略歴」参照。

（28）『万国地理初歩』（学海指針社発行、明治二六年）の挿絵に「天葩刀」のサインが多数確認できる。

（29）前掲（2）馬渕録太郎『木口木版伝来と余談』、一六八―一七〇頁参照。

（30）坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館、昭和一二年）、九三―九五頁参照。

（31）『小国民』については鳥越信『児童雑誌「小国民」解題と細目』（風間書房、平成一三年）を参照した。

（32）「中天狗」については『広告の親玉赤天狗参上 明治のたばこ王 岩谷松平』（たばこと塩の博物館、平成一八年）、「THE HAWK CIGARETTES」「THE TOKAI CIGARETTES」については『明治民営期のたばこデザイン』（たばこと塩の博物館、平成一六年）を参照した。

（33）前掲（2）小野忠重「木口木版年代記（二）」、二四―二五頁参照。

（34）前掲（2）丹尾安典「近代の彫師・合田清」参照。

（35）前掲（2）馬渕録太郎『木口木版伝来と余談』、一四六頁。

（36）芝築地三郎「私が知っている限りの日本の西洋木版の歴史」『町田市立国際版画美術館紀要』第四号、（町田市立国際版画美術館、平成一二年）参照。